

## 青空を見せたい

石垣市立白保中学校二年 豊里 亮太

戦争への一步は死にいたる一步。しかし、平和への一步は幸せへの一步。

僕の祖母は、よく何かを拝むように青空を見る。じーっと……。そしてその後は、決まって僕に話をしてくる。「あつちの空から戦闘機がバアーッと飛んできたよ。バンバン、バババンって、爆弾の音がしたわけよ。はあー、もう怖くてよお。防空壕に逃げ込んださあ。」この話をする時、祖母の目は険しくなり、うっすら涙がたまっている。これ以上話をしたら、泣いてしまうから話さない。そんな感じで話は終わる。なぜか、僕も何も聞き返さない。「爆弾に当たった人はいたの?」「防空壕って、どんな感じ?」あとになると聞きたいことは浮かぶのに、こんな表情をしている時の祖母には、何も聞けない。ヒリヒリした祖母の思いを感じるからだ。

あれから七十四年……。七十四年も経ったのに、祖母の心はまだ癒えていない。時間が解決する。時々耳にする言葉だが、祖母には、いや戦争体験者には通用しないことなんだと胸が痛くなる。

戦争があつた時、祖母は五歳、祖父は十歳だった。祖母の家族も祖父の家族も爆弾から身を守る、生きること必死だった。戦争で畑も田んぼも作られないから、食べるものは、芋の葉やソテツの実、そして時にはカタツムリだったらしい。カタツムリ……。今の生活では考えられない食べ物である。芋の葉にしても、芋は食べるけど、わざわざ葉っぱまでは食べない。ソテツなんて、観葉植物として見るだけで、ご飯にしようとは思わない。特にソテツの実は飢えをしのぐものとして最適な上に、たくさん自生していたからいっぱい採りたかった。でも、昼間に行動すると爆弾にやられるので、夜になってからしか採りに行けなかったらしい。他に祖父が人の畑の芋を盗んだというのも衝撃的な話だった。曲がったことが嫌いな祖父が芋を盗むなんて……。戦争がなくても貧しかったと言っていたが、戦争が起きたことによつて、食物も育てられない、確保できない、さらには祖父の心までも狂わせたのだと思うと、言葉を失ってしまった。さらに、どんな酷いことより祖父を苦しめたのは、母親の死だった。

祖父の母親は戦争マラリアで亡くなった。

八重山は爆弾によって亡くなる人以上にマラリアという伝染病によって亡くなる人が圧倒的に多かった。マラリアとはハマダラカという蚊にかまれて感染するもので、発症すると高熱を出し、ほとんどの人が死に至る。八重山では戦争が始まる前から存在していた伝染病だが、それまでは、マラリアになりそうな所へ行かない事で防いでいた。ところが、戦争が始まり、集落にいたら爆弾でやられるので、山に逃げ入り、そこでマラリアになってしまったのである。もし、戦争がなければ、マラリアになどかかることはなかっただろう。そういう無念の思いから、戦争の時にかかったマラリアを「戦争マラリア」と特別に呼んでいるのである。

その「戦争マラリア」に祖父の母親はかかって死んだ。祖父が小学校五年生の時である。五年生と言えば、僕は学校に行つて大好きな野球を一生懸命していた。父や母の命が危ないなんて、一度も想像したこともなかった。それなのに、祖父は戦争に母親を奪われてしまった。祖父は、食べ物に困つた話や戦闘機などの話はよく話してくるが、母親の話になると、「戦争マラリアで死んだ。」という事以外、何も話さなくなる。祖父も祖母と同じで、これ以上話したら泣いてしまう。と、色んな思いを胸の奥に押しこんでいるような顔になる。祖父の心も癒されていないのだと感じた。

戦争で得た心の痛みは、時間が経つても小さくなることなく、体験者の心を痛めている。要するに、何年経つても戦争を過去の話にすることはできないのである。だから、僕はこれからもずっと戦争を起こしたくない。それが、祖父や祖母など戦争体験者にできる唯一の癒しにもなるのではないだろうか。

そのために、僕や戦争を体験していない人は身近な体験者から話を聞き、機会を作つてそれを伝えたり、戦争がおきかないような政治をしようように声を上げたりしなければならぬと思う。

今、僕の島、石垣島には自衛隊基地が作られようとしている。沖縄本島の辺野古でも米軍基地建設が着々と進んでいる。確かに、基地があることで、国や島が守つてもらえる部分はあるかもしれない。それでも、戦争のことを考えると、基地のあるところから戦争が始まるのではないかと心配してしまうのである。どうにか武器を捨て、基地のない国作りはできないものだろうか。

僕はいつまでも祖母に青空を見せたい。